

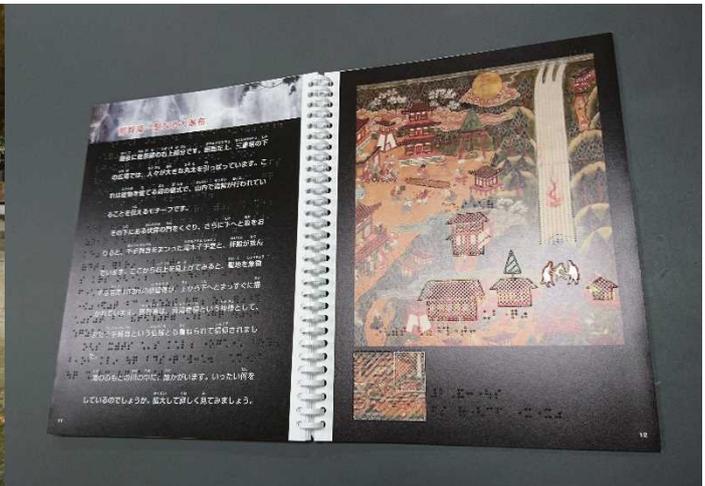
事業名称	地域と協働して文化遺産の活用と継承を担う博物館づくり事業		
実行委員会	和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会		
中核館	和歌山県立博物館		
	住所	〒640-8137 和歌山県和歌山市吹上 1-4-14	
	TEL	073-436-8670	FAX 073-423-2467
	ホームページ	https://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/	
構成団体	歴史資料保全ネット・わかやま、和歌山県立和歌山工業高等学校		
事業開始時点の課題分析	<p>和歌山県立博物館では、県内に残された豊富な文化遺産を後世に伝えるために、継続的に資料の調査研究、収集保管、展示公開、その他普及事業を行っている。そうした中で近年においては、続発する文化遺産の盗難防止のための啓発や、文化遺産を通じた防災意識の啓発など、従来の博物館事業の枠組みの中では想定されなかった事業についても、博物館機能を活用しながら能動的に取り組んでいる。そしてまた、あらゆる人々に開かれた博物館作りを進める中、障害者総合支援法の基本理念にも基づき、特に視覚障害者の博物館利用促進の取り組みを行っているところである（平成 26 年度バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰内閣総理大臣表彰受賞）。</p> <p>和歌山県立博物館のこうした新たな取り組みのそれぞれについては全国的に類例の少ない先駆的な事業であり、これまでもその実践事例を積み重ねてきたが、全国的には同様の活動の萌芽は見えるものの普及にまでは至っていない。和歌山での実践としてさらに事業を継続することによってその内容の充実を進めるとともに、そうした実践方法の共有化をさらに図る必要がある。</p>		
事業目的	<p>地域における文化遺産をいかに継承していくかという問題は、高齢化や人口減少による地域コミュニティの縮小が全国的に顕在化しする中で、今後より重要性を増してくる。また東南海・南海地震に伴う津波被害が想定される中で、過去の被害記録を避難に活かし、また文化遺産の喪失を最小限に留めるための取り組みも必須となっている。これらの課題に対して県立博物館がその機能（調査・研究・収集・保管・展示・普及）を活用して、地域に伝わる文化遺産の価値・意味の顕在化と共有化を図り、また地域に伝わる文化遺産の新たな保管方法（新技術の利用）の提示と実践を行うことにより、地域と資料との結びつきをより強固なものとして、住民の地域の文化や歴史への関心を高めるための役割を、地元自治体や関係機関などとも連携しながら、能動的に担うことが本事業の目的である。かつ視覚障害者など少数利用者のための鑑賞環境の整備を行うことで、あらゆる人々に開かれ情報を共有化する、新時代の理想的な博物館の構築につながることをもう一つの目的とする。</p>		
事業概要	<p>本事業では次の 3 つの取り組みを行った。</p> <p>①歴史資料保全ネット・わかやま（民間ボランティア組織）、和歌山県内の博物館施設等で構成される和歌山県博物館施設等災害対策連絡会議、東南海・南海地震に伴う津波被害が想定される市町村の防災担当部局・教育委員会、自主防災組織などと連携し、過去の「災害の記憶」を地域全体で共有し、継承していくことで、将来起こりうる東南海・南海地震に対し、地域住民が自らの生命と財産を守っていく活動を支援する取り組みを行った。同時に被災という事態を想定し、被災した文化財を保全する活動の前提となる</p>		

	<p>被害想定地域の文化財の所在確認調査を行った。調査対象地域として白浜町・日高町を設定し、調査を行った。</p> <p>②過疎・高齢化等で維持継承の困難となっている集落の文化遺産を最新技術で複製し信仰環境を維持しながら保存継承する防犯への取り組みで、和歌山県立和歌山工業高等学校と和歌山大学と協力して精巧な文化財レプリカ（お身代わり仏像）を作製し、田辺市観音寺へ安置し、地域住民との交流を行った。</p> <p>③視覚障害者が地域の歴史や文化に関する情報に接するための「さわれるレプリカ」及び「さわって読む図録」を、和歌山県立和歌山工業高等学校・和歌山大学・和歌山県立和歌山盲学校との協力によって作製した。さわって読む図録は盲学校・点字図書館ほかへ提供した。</p>
<p>実施項目 ・ 実施体系</p>	<p>(1) 地域文化の発信の核となる美術館・歴史博物館</p> <p><input type="checkbox"/>ア 美術館・歴史博物館の情報発信、相互連携</p> <p><input type="checkbox"/>イ ユニークベニューの促進</p> <p><input type="checkbox"/>ウ 地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>エ 地域に存する文化財を活用した地域共働の創造活動や地域の魅力の発掘・発信</p> <p>(2) あらゆる者が参加できるプログラム及び学校教育や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動</p> <p><input type="checkbox"/>ア 小・中・高等学校と連携した地域文化の担い手の育成</p> <p><input type="checkbox"/>イ 大学等と連携した国内外で活躍する文化人材育成プログラムの開発</p> <p><input type="checkbox"/>ウ 社会人ほか多様な対象者のための学習講座の実施</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>エ 障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援等の事業</p> <p>(3) 新たな機能を創造する美術館・歴史博物館</p> <p><input type="checkbox"/>ア 観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等他分野との連携・融合による活動</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>イ 文化財の新たな保存管理・活用の手法の開発</p>
<p>施後の 成果・効果等</p>	<p>3つの事業のうち①では、調査対象地域を中心に19回の調査を行い、調査報告書の作成と画像データを収集して災害時の被災文化財保全活動の円滑化の基盤を構築した。調査対象地域の住民には小冊子『先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝えるV』（平成31年1月17日発行、2万部）等を関係自治体の協力を得て全戸に配布した。また白浜町と日高町で「災害の記憶」の発掘と文化遺産の所在確認調査で明らかになった内容を住民に伝える現地学習会を実施した（白浜町2月23日参加者53人、日高町2月24日参加者90人。発表資料集を作製し配布）。アンケート調査により発掘した「災害の記憶」について、詳しく知らない参加者が白浜町で8割、日高町では9割いることが明らかになり、今回の事業に大きな効果があったことが確認できた。マスコミ報道も多数あり、コラム「先人たちからのメッセージ 防災減災わかやま」を産経新聞に掲載した（計6回）。</p> <p>②では県立和歌山工業高校及び和歌山大学教育学部との連携により、田辺市稲成町の観音寺本尊の観音菩薩立像（平安時代後期）の文化財レプリカを作製し、それぞれ実物は博物館で保管して、現地にレプリカ（お身代わり仏像）を安置した。盗難や災害の被害から文化財を守りながら、信仰環境の変化を少なくする取り組みで、被提供者からは</p>

「人家から離れた場所だったので安心した」等の意見があり、顕著な防犯、防災効果があった。現地への奉納は平成31年2月26日に行い、製作に携わった高校生5名、大学生1名が地域住民と交流を行った。マスコミ報道も多数あり、事業のアピールにつながった。

③では、田辺市観音寺の観音菩薩立像のレプリカをさわれるレプリカとして活用し、視覚に障害のある方をはじめ、あらゆる人が触れられる資料とした。またさわって読む図録は県立和歌山盲学校との連携して『さわって読み解く那智参詣曼荼羅』を作製した(16ページ)。大画面絵画に示される豊饒な物語と、参詣曼荼羅の用途を平易に伝える内容で、視覚障害者の郷土学習、美術学習の教材とした。活用を図るため県立和歌山盲学校、県内公共図書館、近畿盲学校、主要点字図書館、全国博物館、大学図書館に提供した。全盲の利用者から「参詣曼荼羅というジャンルの絵の内容がよく分かった」などの意見があり、さわれる絵による学習効果が確かめられた。これらの取り組みは視覚障害者が情報にアクセスする手段として高い効果があり、博物館展示のユニバーサルデザイン化を促進させる効果があった。

【事業実績】



上:①記念碑調査(白浜町大古)2018年9月18日 左下:②お身代わり仏像奉納(田辺市観音寺)2019年2月16日 右下:③さわって読む図録『さわって読み解く那智参詣曼荼羅』(2019年3月発行)